
Exection = 罪人 =

舞代ナツコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Execution Ⅱ 罪人Ⅱ

【Nコード】

N9665U

【作者名】

舞代ナツコ

【あらすじ】

人を殺してしまった男女6人が廃墟の建物に集められた。

【ここはお前達の処刑場だ……。お前達は気づいていなかった……。だから選ばれたのだ。お前達は気づけるのか……。それとも気づく前に死に絶えるのか……。】

自分達が気づいていない事……？

恐怖の処刑が今始まる……。。

1話【罪人達】

俺は伊藤和俊、22歳。

今は職を探しているがどれも面接で落ちてしまう。

最近の実家の自分の部屋に引きこもってばかりだ。

「和俊！――家にこもってばかりじゃなく職を探せ」

両親は俺の部屋に来て毎日そんな事を言う日々。

「お父さんはアナタの事を思っ言っているのよ――」

父さんは昔からエリートだから他人に恥をかくのが嫌なだけだ。

自分勝手だ……コイツらは。

「一応探してるよ……俺にもペースがあるんだ……！」

ムキになって俺は両親に向かって怒鳴っていた。

二人はとても驚いていた様子だったけど　しばらくすると溜息をついた。

「お前には俺が言いたい事は伝わらないんだな……」

両親の瞳を見ると失望に満ちたような感じで俺のほうを見ていた。

「もういい。今のお前に言ってもムダになるだけだ」

その言葉で俺の中の何かが切れた気がした。

昔から父がエリートだから俺は周りの目を気にしながら頑張っていたんだぞ……。

人の気も知らないで……

二人は俺に背中を向けて部屋から出て行くとする。

俺は昔やっていた野球で使っていたバットを手に握り締める。

（いなくなればいい……そうすれば俺は自由だ！）

迷わず俺は二人を背後から頭を思い切り殴った。

倒れ込む二人。

何かを言っている二人。

でも今の俺には何も届かない。

それから何回も何回も何回もバットを振り下ろし続けた。

そのうち二人は動かなくなった。

「ハア……ハア………」

我に返ると自分の体には返り血がベツトリとついていた。

「…やった……これで俺は自由なんだ！！！！！」

俺はそのままベッドの上に倒れ込んだ。

そして俺の意識は途絶えた。

「ん………」

どれくらい眠っていたかはわからないが和俊は目を覚ます。

しかし目が覚めた場所は和俊の部屋ではなかった。

廃墟の建物ような場所の床で寝ていたのだ。

「どこだ……。ここ………」

起き上がろうとするが手に違和感があり見ると手錠がかけられていた。

「なッ……なんだよ！！コレ……！」

手錠に焦る和俊だが、とりあえず立ち上がり薄暗い部屋を出た。

両手は前で手錠をかけられているので、そこまで不便ではなかった。

（ここはどこだ……俺はいつのまに……）

薄暗い廊下を歩いているとどこからか話声が聞こえてきた。

（……誰がいる）

和俊は急いで声のするほうへと向かった。

するとある一室から光が漏れていた。

（あの部屋から……！！！！）

和俊はドアを開ける。

そこには5人の男女がいた。

5人も自分と同じように両手に手錠がかけられていた。

「まだ人がいたんだな」

その中の一人の30歳くらいの男性が和俊に言う。

「あ……あの……ここはどこなんですか？」

「私達も今それを話し合ってたのよ」
和俊よりも年上であろう女性が言う。

【みんな目が覚めたようだね……】
ガガッ……

古びたスピーカーから声が聞こえ、みんなはスピーカーを見る。

【ここは処刑場だ。お前達は人を殺した事があるな？】

和俊は両親の事が頭に過ぎる。

他の人達も顔を曇らせていた。

【その罪を償わせるためにお前達を呼んだ……。お前達は自らが殺した奴よりも苦痛を与えてやろう……】

「ふざけんじゃねーよ!」

若い男性が壁を蹴りながら怒鳴る。

「俺達ばっか悪い奴みてーじゃねエかよ!」

若い男性の怒鳴り声では知らないがスピーカーの音が止まる。
きつと監視カメラからコチラの様子はわかるのだろう。

(確かに…殺された側にも原因はあるのに……)

和俊も心の中で思っていた。

【——…気づいていないからこそ…お前達は悪いのだ】
スピーカーの声にみんなは黙り込む。

【お前達は気づくのか……それとも死ぬのか……】

「“気づけ”ば…俺達は生きてここから出られるのか……？」
和俊の質問にスピーカーの声の主は黙ったままだった。

【——…5時間後にコチラからまた連絡をしよう】

そう言うときスピーカーがプツンと切れてしまった。

その瞬間、建物内にジーと大きな音が鳴り響いた。

「きゃっ……。な、何？」

「タイマーが何かの音じゃないかな……。開始の合図みたいな」
音が鳴り止むと再び沈黙が流れる。

そしてその場にいた6人は顔を見合わせる。

(俺達は……一体何に気づいていないんだ!!!)

2話へ続く……

2話【理由】

「クソッ！一体何なんだ」

若い男性は壁を蹴る。

6人は部屋の中でずっと黙っていた。

今から何が起こるのかわからない恐怖に怯えながら……。

「ここにいても何も変わらない……手分けして出口がないか探そう……」
30歳くらいの男性がみんなに言う。

「僕は桜井歩だ。弁護士をやっている。よろしくな」

歩は呑気に自己紹介をする。

「情報は大切だ。僕達は同じ理由で連れてこられたようだからな」

「あ……私は三木綾架です。大学一年生です……」

歩の言葉に部屋の隅に座っていた黒髪の少女が言う。

「伊藤和俊……。フリーターです……」

和俊も流れて自己紹介をしてしまう。

歩の言うことも一理あると思ったからだ。

「私は橋野哲郎です……。会社員だったのですが、クビになってしまいました」

頭を掻きながら言う男性。

この中では最年長だろう。

「板田明美よ。25歳の主婦。よろしくね」

余裕そつに明美はウインクをしながら言う。

若い男性も渋々口を開いた。

「横田裕次郎だ……。一応読者モデルやってる」

これで全員の名前を知る事が出来た。

「どうするんですか？」

和俊は歩に聞く。

「まだ一つ聞かなければならない事がある……。君達は誰を殺したんだい？」

歩の言葉に皆は固まってしまふ。

「僕は兄を殺したよ。優秀な兄でいつも優しくったんだけど、【優秀】だからプレッシャーだった……」

「俺も…そんな感じで両親を殺してしまいました」

和俊が言うつと歩は優しく微笑んでくれた。

「俺はストーカー女を殺したよ。ファンだとか言ってアイツは異常だったからな…」

あれを放っておいたら俺が精神的にやられてたよ」

「私は…彼氏を。私の事を大切に思っているんですけど束縛が激しくて暴力もあつて…耐えられなくなつて……」

綾架の喋る声はだんだんと震えてきて今にも泣き出しそうだった。

「私は自分の子供を殺したわ。生活が苦しかったから…。5歳と7歳の子よ」

「私は会社がクビになり、生きていく氣力がなくて一家心中しようとしたんです。」

妻と娘を殺して自分も死ぬつもりだったんですがね…」

6人の殺した理由も人物も全員一致はしていない。

集められた共通点は【殺人】しかないのだ。

「じゃあ次は二手にわかれて出口を探してみよう」

この事態に冷静に対応している歩に文句をいう者は誰もいない。

和俊・裕次郎・綾架は部屋を出て右へ。

歩・哲郎・明美は部屋を出て左へ行く事になった。

「何かあつたら叫ぶんだよ」

歩の言葉に頷いて二手にわかれて歩きだした。

「チツ…暗いな……」

廊下は薄暗く、近くににいる人の顔がやつと見えるくらいだ。

「どこかにブレーカーは無いんでしょうか…。キャッー!」

綾架は軽く悲鳴をあげると転んでしまった。

和俊と裕次郎は綾架を起こしてあげる。

「ありがとうございます…。今何かにつまずいて…」
足元を見るが暗くてよくわからない。

しかし何かがある事だけはわかる。

その瞬間、廊下の明かりがパツとついた。

久しぶりの光に、三人は目を細める。

「あっちのグループが光を見つけてくれたのかも……」

和俊は安心する。

「キャアアアアア！……！！！」

突然綾架が叫び和俊と裕次郎のほうへ飛びつく。

「ったく…何だよ。驚かせるなっつーの…」

しかし綾架の瞳からは涙がこぼれ落ちていた。

体も異常に震えている。

「あ……あれ……………」

綾架はさつき自分がつまづいた所を指差す。

和俊も裕次郎も言葉を失う。

そこには肘から下の腕が落ちていた。

5本の指は全てありえない方向に折れ曲がっていた。

爪も何枚か剥がれていた。

「な…何だよ…コレ。俺達が来る前にも誰がいたのか…？」

「何で腕が……」

呆然とする二人。

「これが【処刑】かよ…。一気に殺すんじゃないかって…もてあそんで殺すのかよ…！」

裕次郎は悔しそくに壁を殴る。

「何で俺達がこんな目に合わないといけないんだよ…！」

裕次郎は叫ぶ。

するとそこへ他の三人がやってきた。

「叫び声が聞こえたけど…何が……………」

歩が三人に聞こうとしたが床に転がっている腕を見ると黙り込んで

しまった。

「何よ…これ」

明美も哲郎も驚いている様子だった。

「一回部屋に戻って落ち着こう…」

歩の言葉に無言で頷き、6人はさっき集まっていた部屋へと戻っていった。

3話に続く……

3話【疑惑】

6人は部屋に戻り、静かに床に腰を下ろす。

「そういえば…電気を付けたのって歩さん達ですか…？」

「ああ…。偶然見つけたんだよ。明かりがついて良かったよ」
和俊の質問に歩は丁寧な答えてくれた。

周りを見渡すと、綾架はまだ涙目で傍に明美がついている。

「そういえば歩さん達が行った方向には何かありましたか」
すると歩だけでなく明美と哲郎もピクツと反応する。

その反応に和俊は首を傾げる。

「和俊君と裕次郎君。ちょっとついて来てくれないか？見せたほうが早い…」

「綾架ちゃんとは私と哲郎さんと待つてようね」

明美は綾架がついて行かないようにする。

歩に続き、和俊と裕次郎は立ち上がり部屋を出る。

少し部屋から離れると歩は口を開いた。

「綾架ちゃんが見ると、刺激が強いかもしれないからね…」

その言葉に和俊は先程見た腕の事を思い出してしまう。

明かりはついていますが、薄暗い廊下を三人は歩く。

一直線の廊下に、部屋がいくつかあるだけの建物。

すると歩がある部屋の前で立ち止まった。

「ここに何があるんだよ」

「見ればわかるよ」

歩の返答に舌打ちをしながら裕次郎はドアノブに手をかける。
少し錆びているためドアは少し開きにくくなっていた。

ギィィ…と不気味な音をたてながらドアを開く。

「な…んだよ……コレ」

和俊も部屋の中を見ている。

するとその部屋は床にも壁にも濁った血がベッタリとついていた。

他にも、人を張り付けにする板などの拷問に使われるような道具がたくさんあった。

どの道具も使用された痕跡が見られる。

「最初はこの部屋がよくわからなかったけど、さっき見た腕でわかったよ……」

歩が静かに言い出した。

「俺達……ここで処刑されるの……？」

「こんなの処刑じゃねエよ！！！！あの腕見ただろ！！！！」

裕次郎の言葉に和俊は黙る。

「爪は剥がされて指だって全部骨が折られてた……」

腕を切り落とした所を見ると切れ味の悪い鋸で切られたか、何回もオノを叩きつけられたような切り傷だった……」

和俊はあまりしつかりと見ていなかったため、裕次郎の説明にゾワツとする。

「凄い観察力だな」

歩が冷静に裕次郎に言う。

裕次郎はハツとしたように言葉を続けるのをやめて目をそらす。

「……別に……それくらい当たり前だろ……」

裕次郎と歩の間の空気が少し悪くなったように感じた和俊。

「と、とりあえず戻ろう。皆で一緒にいたほうがいいし……」

「あ……ああ……そうだな」

和俊が言うのと裕次郎は部屋から出て廊下を歩いていく。

和俊と歩も部屋を出てドアを閉める。

先を歩く裕次郎に和俊がついて行こうとすると歩が腕を掴んで止めた。

「？どうしたんですか……？」

「俺は裕次郎君が怪しいと思う……」

いきなりの言葉に和俊は困惑する。

歩は和俊から手を放してコソツと話す。

「ずっと思っていたんだ……。もし俺達があ腕の主のようになるん

だつたら誰がそれを実行するのか…」

「誰って…あのスピーカーの人とか…」

「それならスピーカーからじゃなく、直接来てればいいだろ？」

歩の核心をついていくような言葉に和俊は少し戸惑う。

「俺は【処刑】を執行する奴は、すでに潜んでると思っている」

「……だつたら全部の部屋を調べれば…」

「そしたら僕達にバレてしまう…だから僕達の中に潜ませたんだよ…執行人を…」

歩の言葉に和俊はビクツとする。

「それで裕次郎さんが怪しいって…？」

「まあ何人そういう人がいるのかはわからない…。もしかしたら自分以外かもしれないしな」

その発言に驚いて和俊は歩の事を見る。

「おい、早く行こうぜ」

先を歩いていた裕次郎が振り向いて二人の事を呼ぶ。

「ああ、今行く」

そう言つて歩は裕次郎のほうへと何事も無かつたかのように歩いていく。

和俊も歩の言葉を気にしながらも、二人の後に続いて歩きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9665u/>

Exection = 罪人 =

2011年10月9日04時27分発行